



Title	サハ語（ヤクート語）の多回接辞の多機能性： 参与者多数性指向と意味拡張指向
Author(s)	江畑, 冬生; Ebata, Fuyuki
Citation	北方言語研究, 15, 1-19
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112968
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94611
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_Ebata.pdf



サハ語 (ヤクート語) の多回接辞の多機能性 * — 参与者多数性指向と意味拡張指向 —

江 畑 冬 生
(新潟大学)

キーワード: チュルク語族、形態統語論、多回性、アスペクト

1. はじめに

サハ語 (ヤクート語) の多回接辞 (iterative) には、様々な含意が見られる。このことからサハ語多回接辞を、単にアスペクト接辞の1つとして「複数回の動作」を表す形式と捉えるのは適切とは言えない。本論文で記述する多回接辞の多様な含意は、主語の単複、目的語の有無と単複、否定接辞の有無、動詞の語彙の意味などに関わっている。同系言語との対照からもサハ語多回接辞の多機能性は際立っており、むしろ近隣の異系統の言語に見られる意味拡張志向に共通する点がある。

第2節では、多回接辞がいくつかの異形態を持つことを確認した後で、その起源についての私見を述べる。第3節では、先行研究の記述に基いて多回接辞の用法を概観し、その機能を説明する上で問題点を提示する。第4節では、筆者が主としてコーパスから収集した例文を検討し、多回接辞が様々な含意を持つことを示す。第5節では、同系言語との対照を行うことで、サハ語多回接辞は比較的に用法の範囲が広いと言えることを示す。第6節では、近隣の異系統の言語との対照を行うことで、サハ語多回接辞に見られる意味拡張指向は、近隣言語と部分的に共通すると主張する。第7節で本論文の結論をまとめる。

2. 多回接辞の形態とその起源

多回接辞は、動詞語幹に付加して新たな動詞を生む派生接辞である。多回接辞には、表1に示すように音韻的条件からは予測不可能な多くの異形態がある (同じ動詞に別の異形態が自由変異で付加しうることもある)。母音語幹動詞に付加する場合、語幹末の長母音が短母音に交替する (これは他の動詞派生でも見られる交替である)。

* 本研究は、科研費 (課題番号 20H01258, 21H04346, 23K21929) および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「ユーラシア諸言語における談話の文法」の支援を受けたものである。出典が明記されていないサハ語およびトゥバ語の例文は、筆者によるフィールドワークまたは筆者の作成したコーパス資料からの例である。グロス付与の詳細ルールに関しては、江畑・Akmatalieva (2022: 8-10) の方針に従うものとする。本稿の内容は日本北方言語学会第7回大会 (2024年9月22日、室蘭工業大学) および東京外国語大学AA研の共同利用・共同研究課題「ユーラシア諸言語における談話の文法」2024年度第2回研究会 (2024年12月7日、東京外国語大学本郷サテライト) での拙論に基づく。菱山湧人氏をはじめとする方々から草稿に対して多くのコメントをいただいたことに感謝申し上げます。査読者からの極めて有益なコメントの数々にも深く感謝する。

[表 1] 多回接辞の主な異形態

異形態	語幹の条件	語例
-(i)telee	子音語幹・母音脱落語幹	<i>buol-utalaa</i> 「なる」, <i>körs-ütelee</i> 「会う(<i>körüs</i>)」
	母音語幹	<i>ita-talaa</i> 「泣く(<i>itaa</i>)」, <i>toxta-toloo</i> 「止まる(<i>toxtoo</i>)」
-telee	語幹末が /r, l, y/ ¹	<i>bier-telee</i> 「与える」, <i>suuy-talaa</i> 「洗う」
-ielee	子音語幹 (単音節語)	<i>teb-ielee</i> 「蹴る」, <i>üt-ialaa</i> 「撃つ」, <i>tard-ialaa</i> 「引く」
-elee	使役接辞 -(i)t の後など	<i>alžat-alaa</i> 「壊す」, <i>ergit-elee</i> 「回す」, <i>üit-alaa</i> 「送る」
-tee	使役接辞 -er の後など	<i>tüher-tee</i> 「落とす」, <i>kördör-töö</i> 「見せる」

Xaritonov (1960: 23-25) や Ubrjatova (1982: 277) などロシアの先行研究では、多回接辞 -(i)telee ないし -telee の由来を -te (古い段階の複数接辞 -t に遡る形式) + -lee (出名動詞派生接辞) の結合と考えている。しかしこの説明には3点の問題がある。① 動詞語幹に名詞の複数性を表す形態素が付加する点が不自然である。② /t/から /te/への変化を説明する必要性がある。③ 異形態 -ielee が /t/ を含まないことの理由が必要である。

筆者は、同系のトゥバ語の多回接辞 -gile からの二通りの音変化を提案する。すなわち一方では /g/ から歯茎音への変化により -(i)telee ないし -telee が生じ、他方では /g/ 脱落と母音の代償延長により -ielee が生じたものと見る (サハ語の母音語幹動詞は必ず長母音終わりになるため、接辞末母音の長母音化はいずれにしても生じる)²。同様の二通りの音変化は、使役接辞の異形態の1つ -gis からも仮定できる³。

[表 2] 使役接辞の異形態における対応

	トゥバ語	サハ語
/g/から歯茎音	<i>kör-güs</i> 「見せる」	<i>kör-dör</i> 「見せる」
/g/脱落と代償延長	<i>tur-gus</i> 「立てる」	<i>tur-uor</i> 「立てる」
	<i>er-gis</i> 「(氷を) 解かす」	<i>ir-ier</i> 「(氷を) 解かす」

¹ 語幹末に /l/ を持つ語でこの異形態が付加するのは、管見の限りでは *axal-talaa* 「持つてくる」に限られ、しかも *axal-taa* という自由変異形も見られる。

² Anderson and Harrison (1999: 42) は、トゥバ語の多回接辞 -gile の起源として動名詞接辞 -gi + 出名動詞派生接辞 -le の可能性を示している。筆者もこれに賛成する。トゥバ語の動名詞接辞 -gi は単独で用いられることはなく、向格接辞 -že との結合により限界副動詞 -giže を形成するか、後置詞 *deg* が後続して「～するかのように」を表す一種のモダリティ形式を作る。一方で Böhtlingk (1851: 292-293) は、サハ語多回接辞に関して “Das eben erwähnte Affix ist, wie ich schon an einem andern Orte wahrscheinlich zu machen gesucht habe, zusammengesetzt aus dem Affix der Nomina actionis und dem Denominativaffix” 「先の接辞は、私が他で試みたように、動名詞接辞と出名動詞接辞から構成されている」と述べており、結論的には筆者と同じとなる。Ščerbak (1981: 51) は、チュルク語多回接辞の起源としてキルギス語における Batmanov (1940: 47) の説 -bün (?) + -ler (pl) を紹介しているが、音韻的にも機能的にも場当たりの説明であり説得力に欠ける。

³ トゥバ語における使役接辞の異形態 -gis は、5つの動詞語幹にしか付加しない。これらのうち、サハ語に対応する動詞が存在するのは表 2 に示す3語のみである。トゥバ語の継起副動詞 -geš とサハ語の即座副動詞 -eet の間にも、/g/脱落と母音の代償延長という変化を仮定する。一方で /g/ から歯茎音への変化の並行例である可能性があるのは、トゥバ語 *kiir* 「入れる」(*kirgir* に由来するとされる) とサハ語 *killer* 「入れる」の対応である。

3. 先行研究に基づく意味の概観と問題点

多回性 (iterativity) を類型論的観点から扱った初期の研究の1つに Xrakovskij (1997) がある。Xrakovskij (1997: 27) では situational plurality のタイプとして Multiplicative (行為の複数)、Distributive (動作対象の複数)、Iterative (習慣) への分類を行う。ただし Xrakovskij (1997) は多回接辞に特化した研究ではなく、同書所収でタタール語、ウズベク語、トファ語を扱った Nasilov, Isxakova and Rassadin (1997) でも、多回接辞に関する記述はわずかに留まる。

近年の研究である Mattioli (2019: 4) は、pluractionality を plurality or multiplicity of the situations encoded by the verb のように定義する。やはり多回接辞に特化した研究ではないが、第2章の semantic domain に関する議論など参考になる部分が多い。

Xaritonov (1947: 181-182) や Ubrjatova (1982: 276-277) などの参照文法には、サハ語多回接辞の用法について説明がある。例えば Xaritonov (1947: 181) は、“Глаголы многократного вида выражают действие, совершаемое многократно или направленное на несколько предметов.” 「多回体の動詞は、複数回遂行される行為ないし複数の対象に向けた行為を表す」と述べている。Xaritonov (1960: 12-37) は多回接辞の異形態や意味的特徴についてより詳しい記述を行うが、基本的特徴に関する記述は Xaritonov (1947) とほぼ同様である。

たしかに多回接辞の典型的な用法は、(1)のような行為の複数性、(2)のような動作主の複数性、(3)のような動作対象の複数性を表すものだと言える。

- (1) *xahiak-ka suruy-talaa-bit-im*
新聞-DAT 書く-ITER-PST-1SG
「私は新聞に何度も記事を書いた」

- (2) *ñirey-der uhaa-batax-tar emie öl-ütelee-n xaal-bit-tar*
仔牛-PL 長くなる-NEG:R.PST-3PL また 死ぬ-ITER-SEQ 残る-R.PST-3PL
「仔牛たちは長生きしなかった。また死んでしまった」

- (3) *xos-tor aan-nar-i-n aňñ-italaa-n kör-dü-m*
部屋-PL ドア-PL-POSS.3-ACC 開ける-ITER-SEQ 見る-N.PST-1SG
「私は部屋のドアを開けてみた」

これらの先行研究における多回接辞の用法の捉え方には、3つの問題点がある。第1に、先行研究が挙げるものを含めて実際の用例には、行為の複数性・動作主の複数性・動作対象の複数性を純粋に表す例ばかりでなく、プラスアルファの含意を含むものが多い。第2に、動作主の複数性は、主語に付加された複数接辞や述語に義務的に付加される主語の人称・数の標示によっても明らかである（サハ語では 3SG/3PL を義務的に区別するため）。動作主が複数であることを表すには相互共同接辞-(i)s も用いるので、両者の棲み分けも問題となる。第3に、動作対象の複数性は、目的語に付加された複数接辞からも分かる。

以上の問題点を踏まえて本論文では、プラスアルファの含意に着目して例文を見ていく。サハ語多回接辞の多岐にわたる用法を類型論的観点から体系的に捉え、同系言語および近

隣の言語との対照からもその性格を明らかにする。

4. 例文とコーパス調査から見るサハ語多回接辞の多機能性

サハ語多回接辞は、(1)のような行為の複数性を表すのが基本であり、(2)のような動作主の複数性や(3)のような動作対象の複数性を表すことも多い。本論文では、これらの3つが多回接辞の基本的な用法だと考える。特に動作主の複数性と動作対象の複数性を合わせて、**参与者多数性**と呼ぶ。多回接辞がこれらの用法を基本とすることは間違いないが、先行研究やコーパスから得られた例文には様々な含意が加わっているのが見て取れる⁴。

4.1 自動詞に付加する場合

多回接辞が自動詞に付加する場合には、単に行為の複数性や動作主の複数性を表すだけでなく、以下のような含意を持つ例がある。

まず行為の複数性に関連して、多回接辞が**反復移動**を表すものがある。この含意は特に移動動詞に見られるもので、Ubrjatova (1982: 276) にも *xaam-italaa* 「行ったり来たりする」 (<*xaamp* 「歩く」) の例がある。

- (4) *kusčut-tar* *üöhee* *allaraa* *bar-italaa-bit-tara*
鴨猟師-PL 上 下 行く-ITER-PST-3PL
「鴨猟師たちは、[川沿いを] 上下に行ったり来たりした」

- (5) *sahar-bit* *sebirdex* ... *inni-ber* *kenni-ber*
黄色くなる-PST 葉 前-POSS.1SG:DAT 後-POSS.1SG:DAT
köt-üölüü *ooññoo-to*
飛ぶ-ITER:SML 遊ぶ-N.PST:3SG
「黄色くなった葉が (中略) 私の前後を飛び回って遊んだ」

動作主の複数性に関連して、「次々に」「各自が」などの含意がよく見られる。本論文ではこれを**動作主の個別性**と呼ぶ。逆に言えば、多回接辞が複数の動作主の同時連携を含意することは稀である。

- (6) *iti* *kem-ŋe* *žon* *biir-dii-lee-n* *serii-tten*
その 時-DAT 人々 1-ずつ-VBLZ-SEQ 戦争-ABL
kel-itelee-n *bar-di-lar*
来る-ITER-SEQ 行く-N.PST-3PL
「その当時、人々は1人ずつ戦争から戻り始めた」

⁴ 筆者が作成したサハ語コーパスは、サハ語週刊新聞 *Эдэр Саас* 紙 (1999年7月~2001年6月) および *Кыым* 紙 (2006年11月~2009年8月) の電子版に基づく約160万語から成る資料である。

- (7) *bari onno manna naada-lari-gar bar-italaa-bit-tar*
 みな あそこ ここ 必要-POSS.3PL-DAT 行く-ITER-R.PST-3PL
 「みな、あちこち必要な所に行った」

(8)では、出来事が様々な要因によることを含意する。このような例文も動作主の個別性の1つの反映であると筆者は解釈する。

- (8) *kim üliy-en kim ialž-an otton üksü-lere*
 誰 凍傷になる-SEQ 誰 病気になる-SEQ 一方 多く-POSS.3PL
oburgu oko-lor-ton kirban-an öl-itelee-ti-ler
 大柄な 子-PL-ABL 殴られる-SEQ 死ぬ-ITER-N.PST-3PL
 「一部は凍傷で一部は病気で、一方で大半は大柄な子供たちから殴られて死んだ」

次に、**場所の複数性**を表す例がある。(9)(10)は「様々な場所に」を表し、(11)は「様々な場所から」を表す。

- (9) *nehielek-ter aayī saña oskuola-lar tut-ull-utalaa-bit-tara*
 村-PL ごと 新しい 学校-PL 建てる-PASS-ITER-PST-3PL
 「村ごとに新しい学校が建てられた」

- (10) *urukku žil-lar-ga bultuu-r alaas-tar-biti-gar*
 昔の 年-PL-DAT 狩る-PRS アラス-PL-POSS.1PL-DAT
silž-italaa-ti-bit =da xanna davanī uu taxis-batax
 いる-ITER-N.PST-1PL=も どこに も 水 出る-NEG:R.PST:3SG

「以前に私たちが狩りをしていたアラス（凹んだ皿状の草地）に行ったが、どこにも水は出ていなかった」

- (11) *kuorat oskuola-lar-i-ttan uluus-tar-tan emie kel-itelee-bit-ter*
 町 学校-PL-POSS.3SG-ABL 地方-PL-ABL また 来る-ITER-R.PST-3PL
 「[子供たちは] 町の学校や各地方からも来ていた」

意味的には場所の複数性に似ているが、以下のような例は**大きな全体の中の各部分**を表す用法と捉える。「大きな全体」である(12)の *xonuu* 「草原」や(13)の *sibax* 「漆喰」は、主語として単数形で現れる。

- (12) *xonuu xaraar-talaa-bit*
 草原 黒くなる-ITER-R.PST:3SG
 「草原のあちこちが（雪が解けて地面が露出して）黒くなった」
 ‘поле почернело в отдельных местах (появились проталинки)’ [Харитонов (1960: 21)]

- (13) *balavan ih-e kihi silži-bataв-a iraap-pit-a*
 冬住居 中-POSS.3SG 人 いる-NEG:PST-3SG 遠くなる-PST-3SG
bill-er onon manan sibav-a tüh-üteele-bit
 分かる-PRS:3SG あそこで ここで 漆喰-POSS.3SG 落ちる-ITER-R.PST:3SG
 「家の中は人が住まなくなって久しいのが分かる。あちこちで漆喰が剥げていた」

4.2 他動詞に付加する場合

多回接辞が他動詞に付加する場合には、単に行為の複数性や動作主ないし動作対象の複数性を表すだけでなく、以下のような含意を持つ例がある。

まず、動作対象が複数であることを予告するような例がある。次の(14)では多回接辞が付加した動詞一語が文となっており、目的語の数を標示するかのようでもある。この例は動作対象の複数性を際立たせているものと解釈する。

- (14) *silav dien toponim-nar balayda kieņnik tarvam-mit-tar*
 PLN という 地名-PL かなり 広く 広がる-R.PST-3PL
kör-üteliie-kiņ
 見る-ITER-IMP.1PL

「Сылан という地名はかなり広く分布している。[以下の諸例を] 見ましょう」

次に複数の動作対象に対し「1 つも残さず」を表す例がある。動作対象の網羅性と呼ぶ。

- (15) *čaaski-lar-i suuy-talaa*
 コップ-PL-ACC 洗う-ITER(IMP.2SG)
 「コップを全部 (1 つ残さず) 洗え」 ‘перемой чашки’ (все, без исключения)
 [Xaritonov (1960: 21)]

- (16) *inax-tar-i tahaar-talaa-ti-lar*
 牛-PL-ACC 出す-ITER-N.PST-3PL
 「彼(女)らはすべての牛を小屋から出した」 ‘коров повыпускали’ (постепенно всех)
 [Xaritonov (1960: 21)]

動作対象への影響度が強いことを表す例もある。この含意は、動作対象の物理的变化を表す破壊動詞に見られる。

- (17) *et-i bis-talaa*
 肉-ACC 切る-ITER(IMP.2SG)
 「肉を細かく刻め」 ‘разрежай мясо’ (на куски)
 [Xaritonov (1960: 21)]

- (18) *bu mah-i xayit-ala*
 この 木-ACC 割る-ITER(IMP.2SG)
 「この木を細かく割れ」 ‘расколи это дерево’ (на части) [Xaritonov (1960: 21)]

他動詞でも、**場所の複数性**を表す例がある。ただし(19)は大きな全体の中の各部分と見なせるかもしれない。「大きな全体」である *miigin* 「私を」は目的語として現れている。

- (19) *ol uol miigin suturug-unan sirey-ge oyoɔos-ko*
 その 男の子 1SG:ACC 拳-INST 顔-DAT 脇腹-DAT
oxs-utalaa-bit-a
 打つ-ITER-PST-3SG
 「その男の子は拳で私の顔と腹を殴った」

- (20) *GAI ülehit-ter-e ... dokumuon-ɲutu-n sarsin*
 交通警察 働き手-PL-POSS.3SG ... 書類-POSS.2PL-ACC 明日
aɣal-aar-iŋ dien bar-an žie-leri-ger
 持って来る-IMP.FUT-2PL QUOT 行く-SEQ 家-POSS.3PL-DAT
ïit-ala-bit-tar
 送る-ITER-PST-3PL
 「交通警察官たちは（中略）『身分証を明日持ってこい』と言って彼らを家に帰らせた」

4.3 動作の受け手の複数性

多回接辞が動作の**受け手の複数性**を含意する例がある。動作の受け手は、与格名詞句として明示的に現れる場合も、文中には現れずに文脈から理解される場合もある。この用法は広義の授受動詞に見られる。

- (21) *vasilij ivanovič arigi kut-utalaa-ta*
 (人名) 酒 注ぐ-ITER-N.PST:3SG
 「ワシリー・イワノヴィチは酒を [みんなに] 注いだ」
- (22) *dokumuon-nar-gi-n xas davaniɲi baɣar-bit üörek-iŋ*
 書類-PL-POSS.2SG-ACC いくつ も 望む-PST 教育-2SG
terilte-ler-i-ger ïit-ala-n
 組織-PL-POSS.3SG-DAT 送る-ITER-SEQ
 「書類をいくつも君が志望する教育機関に送って…」

- (23) *kim-i* *davani* *min* *žie-ber* *killer-ime-ŋ*
 誰-ACC も 1SG 家-POSS.1SG:DAT 入れる-NEG:IMP-2PL
dien *čugas* *žon-u-gar* *et-itelee-bit*
 と 近い 人-POSS.3SG-DAT 言う-ITER-R.PST:3SG

「彼(女)は『誰も私の家に入れるな!』と近くの人々に言った」

4.4 複数の出来事を一括する用法への拡張

多回接辞の用法拡張の 1 つとして、複数の個別的な出来事を 1 つの述語動詞が一括する
 場合がある。筆者はこの用法を**複数事態の一括**と名付ける。まずは自動詞を用いた複数事態
 の一括の例を示す。

- (24) *bu* *ihit-ter-ge* *maariñnii-r* *ürüŋ* *ard-i-gar* *kihil* *kömüs-ten*
 この 食器-PL-DAT 似る-PRS 白い 間-POSS.3SG-DAT 赤い 金-ABL
oŋoh-ullu-but *ihit-ter* *xakasija-va* *arvaŋŋi* *tiva-va* *uonna*
 作る-PASS-PST 食器-PL PLN-DAT 西の PLN-DAT そして
orduk *xoyuu-tuk* *xaya-laax* *altaj-ga* *bari-ta* *tüür-der*
 余り 濃い-ADV LZ 山-PROP PLN-DAT 全て-POSS.3SG チュルク-PL
olor-but *sir-deri-nen* *köst-ütelee-bit-tere*
 住む-PST 土地-POSS.3PL-INST 見える-ITER-PST-3PL

「これらの食器に似る、銀で（所々は金で）作られた食器は、ハカシアおよび西部トゥバ
 で、さらに多くはゴルノ=アルタイスクで、すべてチュルク民族が住んだ土地で見つかった」

- (25) *kini* ... 1935 *sil-laax-xa* *üt-illi-bit* *bütün* *saxa* *sir-in*
 3SG 1935 年-PROP-DAT 送る-PASS-PST 全 サハ 土地-POSS.3SG
ikkis *spartakiada-ti-gar* *kilü-ga* ... *dmitrij bosikov* *uonna*
 第 2 体育大会-POSS.3SG-DAT 片足跳躍 PSN そして
G. makarov *kenni-leri-tten* *ühüs* *ištaŋa-va* *bosikov* *kenn-i-tten*
 PSN 後-POSS.3PL-ABL 第 3 跳躍-DAT PSN 後-POSS.3SG-ABL
ikkis *kuobax-xa* *markovka* *xot-tor-on* *emie* *ikkis* *mieste*
 第 2 ウサギ-DAT PSN 勝つ-CAUS-SEQ また 第 2 位置
buol-utalaa-bit-a
 なる-ITER-PST-3SG

「彼は（中略）1935 年に開催された第 2 回全サハ共和国体育大会で、片足跳躍において
 （中略）ドミトリー・ボシコフと G.マカロフに次いで 3 位、跳躍においてボシコフに次い
 で 2 位、ウサギ跳びにおいてマルコフカに負けこれも 2 位になった」

- (26) *xolobur* 2005 *sil-laax-xa* *maya-taabi* *spartakiada-ka* *atax*
 例 2005 年-PROP-DAT PLN-での 体育大会-DAT 足
ooññuu-tu-gar *toxsus* *mieste* 2006 *sil-laax-xa* *suntaar-ga*
 競技-POSS.3SG-DAT 第9 位置 2006 年-PROP-DAT PLN-DAT
onus *xapsaay-ga* *uon behis* *saaximak-ka* 2003 *sil-laax-xa*
 第10 レスリング-DAT 第15 チェス-DAT 2003 年-PROP-DAT
xaandiga-ka 2006 *sil-laax-xa* *suntaar-ga* *toxsus* *buol-utalaa-bit-tar*
 PLN-DAT 2006 年-PROP-DAT PLN-DAT 第9 なる-ITER-PST-3SG

「[ニユルバ地方はかつてスポーツで優秀だった] 例えば、2005年マヤでの体育大会ではラン競技で9位、2006年スタルでは10位、レスリングで15位、チェスでは2003年にハンドゥガで2006年にスタルで9位になった」

他動詞を用いた複数事態の一括の例には、例えば(27)のようなものがある。この例では、動作主は同じであるが動作対象が異なる複数の出来事を1つの動詞で一括している。

- (27) *saxalii* *aat* *teniy-e* *ilig-i-ne* *oko-lor-bu-n* *žulustaan*
 サハ式 名 広まる-SML まだ-3SG-時 子-PL-POSS.1SG-ACC PSN
ñurgustaan *ayaal* *sardaana* *dien* *aatta-talaa-bip-pi-n*
 PSN PSN PSN QUOT 名づける-ITER-PST-1SG-ACC
tia-ka *olor-or* *ubay-im* *berkihee-n*
 田舎-DAT 住む-PSR 兄-POSS.1SG 驚嘆する-SEQ

「サハ風の名前がまだ一般的でない時代に、私が子供たちをジュルスターン、ニユルグスターン、アヤール、サルダーナと名付けたのを田舎に住む兄が驚嘆して…」

次に示す2つの例は、「AがBをXする」と「CがDをXする」を合わせた複数事態の一括である。すなわち、他動詞主語と他動詞目的語の両方が異なる2つの出来事を、1つの動詞で一括している点で極めて興味深い。理解を助けるために、例文の訳の後に他動詞主語（AとC）と他動詞目的語（BとD）の記号を用いて文構造を簡易的に示すことにする。

- (28) *bair ukoev* *uonna* *ayaal lazarev* *er biir* *Z. abdulmanapov-i*
 PSN そして PSN それぞれ PSN-ACC
ivan anisimov-i *uonna* *aleksej rgorov-i* *aleksej nikolaev-i*
 PSN-ACC そして PSN-ACC PSN-ACC
xot-utalaa-n *final-ga* *bihaar-is-ti-lar*
 勝つ-ITER-SEQ 最終-DAT 見出す-RECP-N.PST-3PL

「バイル・ウコエフとアヤール・ラザレフは、それぞれZ.アブドゥルマナポフとイワン・アニシモフを、そしてアレクセイ・イゴロフとアレクセイ・ニコラエフを負かして、決勝で相まみえた」 [AとCは、それぞれB1とB2を、D1とD2を負かした]

(29)	<i>zakir nuritdinov-ï</i>	<i>čurapčï</i>	<i>uonna</i>	<i>dmitrij škarubon-ï</i>	<i>nerjungri</i>
	PSN-ACC	PLN	そして	PSN-ACC	PLN
	<i>xot-utalaa-bït</i>	<i>miiriney</i>	<i>bökös-tör-ö</i>	<i>jan petrov</i>	<i>uonna</i>
	勝つ-ITER-PST	PLN	選手-PL-POSS.3SG	PSN	そして
	<i>prokopij kirillin</i>	<i>ühüs</i>	<i>miestelen-ni-ler</i>		
	PSN	第3	位置を占める-N.PST-3PL		

「ザキル・ヌリトディノフ (チュラブチュ) とドミトリー・シュカルボン (ネリユングリ) を負かしたミルヌイの選手たちヤン・ペトロフとプロコピー・キリリンが 3 位になった」
[B と D を負かした選手である A と C]

筆者はヤクーツク市内の大学で、教授が学生にプリントを配布する際に、*iit-ala-a-ŋ* (送る-ITER-IMP.2PL) と発言したのを聞いたことがある。これは「A が (自分の分を取って) B に渡せ、B が C に渡せ…」を意図したものであり(28)(29)とは少し異なるが、やはり動作主が異なる連続動作を一括する構造である。

4.5 否定文における多回接辞が表す意味

多回接辞の付加した動詞語幹に、否定接辞が後続することがある。理屈から考えれば否定文は動作が行われないことを意味するため、動作の回数はそもそも問題とならないはずである。従って否定文における多回接辞は、どのような機能を果たすのかが問題となる⁵。

そこでコーパスを見ると、否定文における多回接辞は行為の複数性を表すのではなく、(30)のように動作主の複数性を表すか、あるいは(31), (32)のように動作対象の複数性を表すことが分かる。つまり否定文の多回接辞は、参与者多数性を表す。

(30)	<i>onnuk</i>	<i>tübelte-ler</i>	<i>taxs-italaa-bat</i>	<i>buol-but-tar</i>
	そのよう	出来事-PL	出る-ITER-NEG	なる-R.PST-3PL

「そのような出来事は生じなくなった」

(31)	<i>oskuola-ka</i>	<i>üören-e</i>	<i>silž-an</i>	<i>bu</i>	<i>saahir-bït</i>	<i>žon-ü</i>	<i>kitta</i>
	学校-DAT	学ぶ-SML	いる-SEQ	この	年取る-PST	人々-ACC	と
	<i>ayah</i>	<i>at-an</i>	<i>kepsep-pit-e</i>	<i>dien</i>	<i>suok-a</i>		
	口	開く-SEQ	話す-PST-3SG	という	ない-POSS.3SG		
	<i>onon</i>	<i>üčügedyk</i>	<i>bil-itelee-bet</i>				
	それで	よく	知る-ITER-NEG:3SG				

「学校で勉強していて (学生時代に)、この年を取った人々と口を開けて会話したということは無かった。そのため [彼らのことを] 良く知らないのだ」

⁵ 関連して同系の他言語では、否定文には多回接辞が現れないか、少なくとも現れにくいようである。まず Nasilov, Isxakova and Rassadin (1997: 217) によれば、タタール語では “No negative forms are possible” との記述がある。ただし菱山湧人氏の私信によれば、否定文での使用もわずかに見られるという。トゥバ語でも、筆者が作成したコーパス上で否定接辞を伴う多回接辞の例は1つも無い。

- (32) *iti* *tüün-ü-ger* *sokotox* *xaal-büt* *tihex* *börö* *xon-o*
 その 晩-POSS.3SG-DAT 独り 残る-PST 最後 狼 泊まる-SML
sit-ar *üüteem-mit* *att-ï-gar* *kel-en* *kuhaŋan*
 横になる-PRS 洞窟-POSS.1PL そば-POSS.3SG-DAT 来る-SEQ 悪い
baŋayitik *uluy-an* *ažas* *utut-ala-a-bat-a*
 とても 吠える-SEQ 全く 眠らせる-ITER-NEG:N.PST-3SG

「その晩にたった一匹残った最後の狼が、私たちが寝ている洞窟のそばに来てひどく吠えて、[私たちを] 全く眠らせなかった」

4.6 相互共同接辞-(i)s との違い

4.1 節でも述べたように、多回接辞は動作主の個別性を含意する。これは複数の動作主による同時連携的動作を含意する相互共同接辞-(i)s とは対照的である。この点の傍証として、両接辞が共起することは極めて稀である。

相互共同接辞を含む動詞に多回接辞が付加する例は、筆者が作成したコーパス中で *miestele-s*「位置を占める」2例と *tarŋa-s*「散らばる」1例のみが見つかった。両動詞は *miestelen*「場所を取る」と *tarŋaa*「広がる」に相互共同接辞が付加したものであるが、典型的な相互しないし共同を表すとは言えない⁶。

- (33) *xas =da* *aan doydu-taabi* *tühülge-ŋe* *mieste-le-h-itelee-bit* *A.S.*
 いくつ =も 世界-での 競技-DAT 場所-VBLZ-RECP-ITER-PST PSN
 「いくつもの世界大会で優勝したアレクセイ・ソロヴィヨフ」

逆に多回接辞に相互共同接辞が後続する例は、*iyütalas*「何度も尋ねる」(< *iyüt*「尋ねる」)と *kuotalas*「競争する」(< *kuot*「逃げる」)のみが多数見つかる。前者では相互共同接辞の意味が希薄であり、後者は多回接辞が多回性を表しているとは言えない。このように多回接辞と相互共同接辞が共起することは稀であり、形態的には両接辞が共起しているとしてもそれらの機能が十全に現れることはないと言える。

5. 同系言語との対照

チュルク語の多くが多回接辞を持つことは、チュルク語全般を扱う研究にも指摘がある。例えば Johanson (2021: 582) は、“The widespread type {-GAIA} ~ {-GIIA} ~ {-GIA} ~ {-A}IA} forms verbs meaning ‘to do intensively/frequently/repeatedly’ (Table 28.15)” と述べ、表に9つの言語の語例を挙げている。しかし、具体的例文を挙げながら多回接辞の生産性や用法の範囲を検討しているわけではない。Johanson (2022: 36) では *frequentativity* を表す形式の1つとして多回接辞を位置づけているが、やはり多回接辞に大きくは注目していない。そこで本節では、同系言語の多回接辞に具体的にどのような用法が見られるのか、主として文献資料か

⁶ 相互共同接辞が相互しないし共同を表すとは言えない例には、*atüla-s*「買う」(< *atülaa*「売る」)、*et-is*「口論する」(< *et*「言う」)、*kördö-s*「頼む」(< *kördöö*「探す」) などもある。インターネット検索では、これらの動詞に多回接辞が付加する例も見つかった。

シオル語でも、Dyrenkova (1941: 148) の例文は、行為の複数性、動作主の複数性、動作対象の複数性を表すものに限られている。

- (40) *kuš-tar kel-gile-pča-lar*
鳥-PL 来る-ITER-PRS-3PL
「鳥たちが（次々と）やってくる」 [Dyrenkova (1941: 148)]

サハ語に最も言語特徴が近いと言えるドルガン語に関しては、Däbritz (2022: 536) が “necessarily more than one subject or more than one object is involved” と説明して次の例文などをあげている（例文表記およびグロスの一部は筆者の方式に改めた）⁹。ただし、受け手の複数性 (*kut-attaa* 「(各自に) 注ぐ」 < *kut* 「注ぐ」) や動作対象への影響度 (*bih-italaa* 「(細かく) 切る」 < *bis* 「切る」) を表す例も散見される。

- (41) *kötör-dör barī kōt-ūtelee-n kaal-bīt-tar*
bird-PL all fly-ITER-SEQ stay-R.PST-3PL
「鳥たちはみな飛んでしまった」 [Däbritz (2022: 315)]

北西語群を見ると、キルギス語に関して江畑・Akmatalieva (2022: 65) は「一部の動詞に限って用いられる」だけでなく「複数人に対する命令形式としての機能に特徴がある」点を指摘している。アクマタリエワ・大崎 (2024: 92) は「命令形の2人称複数接尾辞」と呼んでいる。この形式による命令は丁寧ではないがぞんざいでもないという。

- (42) *kol-uŋar-dī taza žuu-gula*
手-POSS.2PL-ACC きれいに 洗う-ITER(IMP.2SG)
「手をきれいに洗ってください」 [江畑・Akmatalieva (2022: 66)]

アルタイ語（南方言）でも、Nevskaja (2017: 240-242) が挙げる例文は動作主の複数性を表すもののみである¹⁰。Dedeeva (2016: 339) には、“аффикс **только множественного числа и второго, третьего лица**” 「2人称複数と3人称複数でのみ用いる接辞」（太字は原文）との興味深い記述がある。Dedeeva (2016: 340) は、多回接辞が2人称で “уничижительный оттенок” 「軽蔑のニュアンス」を持つとも指摘している。

- (43) *bal-dar kapšay mīnaŋ bar-gīla*
子-PL はやく ここから 行く-ITER(IMP.2SG)
「子供たち、はやくここから出て行け！」

⁹ Däbritz (2022) は、行為の複数性を表す iterative (“suffixes -AIA:, -IAIA:, -A:ktA:, -ItAIA:, -AttA:, and -TA:”) と、動作主ないし動作対象の複数性を表す multiple subject/object (“suffixes -ItAIA:, -AttA: and -TA:”) を区別している。ここに引用した例はすべて後者とされる形式である。

¹⁰ Nevskaja (2017: 203) には *ayt* 「話す」からの *ayt-kīla* 「叱る」という意味的に透明でない派生の例もある。

つまりキルギス語とアルタイ語（南方言）の多回接辞には、動作主の複数性を表す傾向が強く見られる。ただし両言語の多回接辞の含意にはやや異なるところもある点には留意しておきたい。

一方で同じく北西語群のタタール語について、Burbiel (2018: 804) は多回接辞の用法の1つに “A partial, superficial or incomplete execution of an action” という説明を与えているが、筆者の分類では反復移動や動作対象への影響度と呼べる例も見られる：йөрҗәләп (yörgäläp) ‘walking back and forth’, ерткаларга (yirtqalarğa) ‘tear to pieces’。菱山湧人氏の私信によれば、タタール語の多回接辞は生産的であり、先行研究では動作が不完全であることや散発的であることも表すと指摘されているという。

次にバシキール語でも、Dmitriev (1948: 196) はわずかな記述に留まるが、Poppé (1964: 71) には *bar-ııla* ‘to walk to and fro’ という反復移動の例が見つかる。菱山湧人氏の私信によれば、先行研究では動作の回数が少ないことも表すと指摘されているという。加えて動作対象の網羅性、動作対象への影響度、受け手の複数性、動作の散発性を表す用例も見つかるという。

チュルク語の下位分類の中で特異な位置を占めるチュヴァシ語でも、菱山湧人氏の私信によれば、先行研究では動作の濃淡や動作の不完全性を表すと指摘されているという。加えて反復移動、動作対象の網羅性、動作対象への影響度、受け手の複数性、動作の散発性を表す用例も見つかるという。

多回接辞について詳しい記述がないものもある：カザフ語（中嶋 2013: 64）、トルクメン語（Clark 1998: 537）、チャガタイ語（Bodrogligeti 2001: 163）。Lewis (2000: 151) によれば、トルコ語の多回接辞は、“no longer be regarded as a live suffix” であるという。さらには多回接辞について特に記述が見られないものもある：ガガウズ語（Pokrovskaja 1964）、アゼルバイジャン語（松長 1999, 吉村・グリエヴァ 2023）、西部裕固語（钟进文 2007, 苗东霞 2019）、ウズベク語（Bodrogligeti 2003, 中嶋 2015）、現代ウイグル語（竹内 1991, 阿依 2023）。

本節では、主として文献資料の記述を手掛かりに、チュルク語の多回接辞の生産性や用法の拡がりを検討した。チュルク語の中でも多回接辞が一定以上の生産性で用いられるのは、北東語群または北西語群の言語とチュヴァシ語に限られるようだ。キルギス語とアルタイ語（南方言）では、動作主の複数性を表す傾向が強いように見える。対してトゥバ語とドルガン語では一定の意味拡張も見られ、タタール語、バシキール語、チュヴァシ語では意味拡張がより顕著である。ただし4.4節で見た複数事態の一括は、現時点ではサハ語以外で確認できていない。

多回接辞が行為の複数性を表すのは当然のこととして別にすると、多回接辞が動作主の複数性あるいは動作対象の複数性を表すことを、本論文では**参与者多数性指向**と呼ぶ。これに対して多回接辞がこれら以外の様々な含意を持ちうることを、**意味拡張指向**と呼ぶ。

6. 近隣言語との対照

サハ語の近隣で話される言語にも、多回接辞 (iterative) ないしはそれに類する接辞が見られることが多い。本節ではこれらの接辞に行為の複数性に加えてどのような含意が見られるのか、前節と同じく文献資料から得られた例に基づき検討する。

まずモンゴル語には、衆動態と呼ばれる接辞-*tsgaa*がある。Janhunen (2012: 146) には詳しい説明がないが、Kullmann and Tserenpil (2008: 134) では文語・口語ともに使用頻度が“quite often”であり“many people (usually more than two) are involved in the action”と説明される（太字は原文）。山越 (2022: 264) には動作主の複数性を表す例文が挙がり、東京外国語大学言語モジュールにも Гэр гэртээ хурдан харьцгаа. 「(それぞれの) 家に早く帰るなさい」が示されている。モンゴル語の衆動態は、参与者多数性指向である。なおモンゴル語では、動作主の複数性を表す派生接辞として相互態接辞-*ld* および共同態接辞-*lts* も別に存在する。

次にツングース語族のうちウデヘ語では、Nikolaeva and Tolskaya (2001: 312-316) と風間 (2010: 236-237) に詳しい記述がある。まず風間 (2010: 236) は分配体 (distributive) -*ktA* が、動作主の複数性 (*ɣua-ktA* 「皆寝ている」) や動作対象の複数性 (*asu-ktA* 「いくつかの服を脱ぐ」) を表す例を示す。これに加えて「自動詞であれば主語の、他動詞であれば目的語の多数性」を表す「能格型」であるとの説明が見られる。これは筆者の用語では参与者多数性指向である。一方で風間 (2010: 237) は継続・多方向体 (diversative) -*wAsi* に対し「移動動詞についてその多方向性を意味する」と説明し、*tukia-wasi* 「走り回る、あっちこちに走る」や *susa-wasi* 「逃げ回る、あっちこちに逃げる」などの例を挙げている。これは第4節で見た多回接辞の意味拡張と共通するところがある。

古アジア諸語やネネツ語の多回接辞にも、意味拡張指向が見られる。

まずイテリメン語では、小野 (2021: 170-171) に行為の複数性 (*owa-sxen* 「何度もキスする」) に加えて、反復移動 (*lale-sxen* 「通う」) や動作対象への影響度 (*ənk'ol-sxen* 「粉々に壊す」) を表す例が挙がる。興味深いことに、最後の例には「動作は1回でも構わない」という説明がなされている。

次にコリマ・ユカギール語では、Maslova (2003: 192-197) によれば多回接辞にいくつかの形式がある。Nagasaki (2023) には、行為の複数性 (*edie-t' 'call several times'*) や動作対象の複数性 (*kudi-t' 'kill'*) だけでなく、反復移動 (*šube-nd' 'run around'*) や将然「～しつつある」(*jaq-uji 'reach', t'em-uji 'end'*) を表す例が挙がる¹¹。

コリヤーク語でも、Kurebito (2024: 187) には‘walk around’の訳が付されている例があり、少なくとも多回接辞が反復移動を含意しうるのである。

アイヌ語における動詞の複数形は、中川 (2024: 142-143) によれば、原則的に自動詞は主語の複数性を、他動詞は目的語の複数性または行為の複数性を表すという。加えて沙流方言等では助動詞 *pa* が動作主の複数性または行為の複数性を表し、静内方言では助動詞 *ci* が「主語または目的語が大勢であることを表す」。一方で幌別方言では、生産性は低いものの接尾辞-*ci* が反復や継続を表しうるといふ (中川 (2024: 155-158))。

ネネツ語の多回接辞も“fairly productive”とされ、Nikolaeva (2014: 45) は反復移動 (*ɣox'ur- 'to swim here and there'*) を表すと見なせる例を挙げている¹²。

このようにサハ語の周辺に分布する諸言語にも多回性を表す動詞接辞があり、行為の複

¹¹ 将然に関連して風間 (2003: 255) では、古典日本語の「つつ」に「複数主体を表す用法がある」ことが指摘されている。

¹² Wagner-Nagy (2019: 534-535) を見る限りでは、同じくサモイェード諸語のガナサン語の iterative -*ka* は、単に多回性や習慣を表すようである。

数性に加えて様々な用法が見られる。モンゴル語の衆動態とウデヘ語の分配体は参与者多数性指向であるが、ウデヘ語の継続・多方向体および古アジア諸語やネネツ語の多回接辞には、意味拡張指向を示すものがある。移動動詞と反復移動、破壊動詞と動作対象への影響度のように、動詞の意味タイプと多回接辞の機能には通言語的な相関も見られる。

7. まとめ

本論文ではサハ語多回接辞の持つ様々な含意に着目して例文を検討し、同系言語・近隣言語との対照から以下のことを明らかにした。

- [1] サハ語多回接辞は、基本的には行為の複数性、動作主の複数性、動作対象の複数性を表す。これに加わる含意として、反復移動、動作主の個別性、場所の複数性、大きな全体の中の各部分、動作対象の網羅性、動作対象への影響度、受け手の複数性、複数事態の一括が観察される。
- [2] 多回接辞は「バラバラの行為・出来事」を一括する。この含意は、複数の動作主の同時連携的動作を含意する相互共同接辞-(i)s とは対照的である。
- [3] 多回接辞の含意と動詞の意味タイプには、一定の相関が見られる：反復移動と移動動詞、動作対象への影響度と破壊動詞、受け手の複数性と（広義の）授受動詞。おそらく、これは通言語的な傾向であると言える。
- [4] 多回接辞が否定接辞と共起する場合、動作主の複数性または動作対象の複数性を表す（言い換えれば参与者多数性指向となる）。
- [5] チュルク語族の中で、多回接辞は北東語群と北西語群である程度の生産性を持つ。キルギス語とアルタイ語（南方言）では動作主の複数性を表す傾向が強く、トゥバ語とドルガン語では一定の意味拡張も見られ、タタール語、バシキール語、チュヴァシ語では意味拡張指向がより顕著である。ただし複数事態の一括は、サハ語に特有の用法である可能性がある。述語において 3SG/3PL を義務的に標示するサハ語とチュヴァシ語およびその近隣で顕著な意味拡張が見られると考えれば、数標示との関連も見いだせる。
- [6] 近隣言語のうち、モンゴル語の衆動態とウデヘ語の分配体は参与者多数性指向であるが、ウデヘ語の継続・多方向体および古アジア諸語やネネツ語の多回接辞には意味拡張指向も見られる。

多回性 (iterativity, многократность) は、従来はアスペクト (глагольный вид) ないし Aktionsart の問題として扱われてきた。本論文の結論からは、多回接辞が動詞の意味タイプ、否定、数標示と関連することやボイス接辞の 1 つである相互共同接辞との違いなどが分かった。近年の言語類型論研究における pluractionality との関わりの検討などが今後の課題である。例えば Mattioli (2019: 45) が示す意味領域地図は、本論文で扱った諸言語の多回接辞が持つ各用法をおおむねカバーするように見えるが、動作主の個別性や複数事態の一括などをこの枠組みの中でどのように位置づけられるか考える必要もある。

略号

ABL: 奪格, ACC: 対格, ADVLZ: 副詞化, AOR: アオリスト, COP: コピュラ, CVB: 連結副動詞, DAT: 与格, FUT: 未来, GEN: 属格, IMP: 命令法, INST: 具格, ITER: 多回接辞, LOC: 処格, NEG: 否定, N.PST: 近過去, PASS: 受身, PL: 複数, PLN: 地名, POSS: 所有接辞, PROP: *propriative*, PRS: 現在, PSN: 人名, PST: 遠過去, QUOT: 引用標識, RECP: 相互共同, R.PST: 結果過去, SEQ: 継起副動詞, SG: 単数, SML: 同時副動詞

参考文献

- Anderson, Gregory David. (1998) *Xakas*. München: Lincom Europa.
- Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.
- Batmanov, I.A. (1940) *Grammatika kirgizskogo jazyka, III*. Frunze.
- Bodrogligeti, András J. E. (2001) *A grammar of Chagatay*. München: Lincom Europa.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- Böhtlingk (1851) *Über die Sprache der Jakuten. Grammatik, Text und Wörterbuch*. St. Petersburg. [Reprinted in 1963, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, vol. 35. The Hague: Mouton.]
- Burbiel, Gustav. (2018) *Tatar grammar. A Grammar of the Contemporary Tatar Literary Language*. Stockholm/ Moscow: Institute for Bible Translation.
- Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Däbritz, Chris Lasse. (2022) *A grammar of Dolgan. A Northern Siberian Turkic language of the Taimyr Peninsula*. Leiden: Brill.
- Dedeeva, V.S. (2016) *Uroki altajskogo razgovornogo jazyka*. Gorno-Altajsk: Gorno-Altajskaja tipografija.
- Dmitriev, N.K. (1948) *Grammatika baškirkogo jazyka*. Moskva: Nauka.
- Dyrenkova, N.P. (1941) *Grammatika šorskogo jazyka*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- Janhunen, Juha A. (2014) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johanson, Lars. (2022) The structure of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages* [Second Edition]. 26-59. London: Routledge.
- Kullmann, Rita and Dandii-Yadamyn Tserenpil. (2008) *Mongolian grammar*. [4th revised edition]. Ulaanbaatar: ADMON.
- Kurebito, Megumi. (2024) *Koryak text 1 with audio materials*. 富山大学人文学部.
- Lewis, Geoffrey. (2000) *Turkish grammar*. [Second edition]. Oxford: Oxford University Press.
- Maslova, Elena. (2003) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin: Mouton.
- Mattiola, Simone. (2019) *Typology of pluractional constructions in the languages of the world*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Nagasaki, Iku. (2023) *Kolyma Yukaghir Texts*. 名古屋大学人文学研究科.
- Nasilov, Dmitrij M., Xoršid F. Isxakova, and Valentin I. Rassadin. (1997) Expression of situational

- plurality in Turkic languages. Viktor S. Xrakovskij (ed.) *Typology of iterative constructions*. München/Newcastle: Lincom Europa. 203-219.
- Nevskaja, I.A., et al. (eds.) (2017) *Grammatika sovremennogo altajskogo jazyka. Morfologija*. Gorno-Altajsk: NII Altaistiki.
- Nikolaeva, Irina. (2014) *A grammar of Tundra Nenets*. Berlin/Boston: Mouton.
- Nikolaeva, Irina and Maria Tolskaya. (2001) *A grammar of Udihe. Part 1*. Berlin/New York: Mouton.
- Pokrovskaja, L.A. (1964) *Grammatika gagauzskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Poppe, Nicholas. (1964) *Bashkir manual*. Bloomington: Indiana University.
- Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščanii*. Moskva: Nauka.
- Ščerbak, A.M. (1981) *Očerki po sravnitel'noj morfologii tjurkskix jazykov (glagol)*. Moskva: Nauka.
- Ubrjatova, E.I., et al. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.
- Wagner-Nagy, Beáta. (2019) *A Grammar of Nganasan*. Leiden: Brill.
- Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.
- Xaritonov, L.N. (1960) *Formy glagol'nogo vida v jakutskom jazyke*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- Xrakovskij, Viktor S. (1997) Semantic types of the plurality of situations and their natural classification. Viktor S. Xrakovskij (ed.) *Typology of iterative constructions*. München/Newcastle: Lincom Europa. 3-64.
- 阿依 サリタナ (2023) 『ウイグル語』 学術研究出版.
- アクマタリエワ ジャクシルク・大崎 紀子 (2024) 『大学のキルギス語』 東京外国語大学出版会.
- 江畑 冬生・Akmatalieva Jakshylyk (2022) 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』 新潟大学人文学部・アジア連携研究センター.
- 小野 智香子 (2021) 『イテリメン語文法：動詞形態論を中心に』 北海学園大学出版会.
- 風間 伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の 3 グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか 一対照文法の試み」 アレキサンダー ボビン・長田 俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』 249-340. 国際日本文化研究センター.
- 風間 伸次郎 (2010) 『ウデヘ語テキスト 6』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 高島 尚生 (2024) 『ハカス語文法 2023 年度言語研修「ハカス語」テキスト 1』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 竹内 和夫 (1991) 『現代ウイグル語四週間』 大学書林.
- 中川 裕 (2024) 『アイヌ語広文典』 白水社.
- 中嶋 善輝 (2013) 『カザフ語文法読本』 大学書林.
- 中嶋 善輝 (2015) 『簡明ウズベク語文法』 大阪大学出版会.
- 福盛 貴弘・竹内 和夫・奥 真裕 (2023) 『トルクメン語入門テキスト』 大東文化大学語学教育研究所.
- 松長 昭 (1999) 『アゼルバイジャン語文法入門』 大学書林.

- 山越 康裕 (2022) 『詳しくわかるモンゴル語文法 [新版]』白水社.
吉村 大樹・グリエヴァ カマラ (2023) 『アゼルバイジャン語文法教本』東京外国語大学ア
ジア・アフリカ言語文化研究所.
苗东霞 (2019) 『甘肃南西部裕固語』商务印书馆.
钟进文 (2007) 『西部裕固語描写研究』民族出版社.

Polyfunctionality of Sakha (Yakut) Iterative: Participant-Plural and Semantic Extension

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

Keywords: Turkic, morphosyntax, iterativity, aspect

This study describes various functions of the Sakha (Yakut) iterative suffix and contrasts its typological features with those of equivalent forms in cognate and neighboring languages. The Sakha iterative suffix expresses a plurality of actions and participants. However, this suffix, traditionally regarded as one of the aspectual suffixes, can have various connotations, such as repetitive movement, individuality of the agent, and plurality of places or recipients, depending on the transitivity and lexical meaning of the verb. Therefore, it is inappropriate to regard the Sakha iterative suffix merely as aspectual. This suffix is also characterized by a semantic orientation combining several different events, contrasting the simultaneous and cooperative implication of the reciprocal-cooperative suffix *-(i)s*. Among Turkic languages, the Sakha iterative is outstanding in its semantic extension and shows a certain degree of commonality with neighboring non-cognate languages.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)